

振り返る未来へ

西松 布咏

令和5年師走29日。夕闇迫る両国駅から真っ直ぐに両国橋を渡り穏やかな鈍色のさざ波をたたえて流れる隅田川の川面を眺めた。

20年ぶりに「幻のお三重」の再演を決めてからの日々を静かに振り返る。

「闇に燈る聲」と題した舞台に「歌行燈」のあかりを燈すためには、幕開けの唄が何より大事だった。師走の両国を流して歩く芸人の二人を登場させ、語りを変えながら鏡花の世界へと誘うには何をどう演奏したら良いか独りあれこれ悩む孤独の日々であった。今まで培った芸を見直す時間があればあるほど自分の未熟さ、不器用さが浮き彫りになり、徐々に「歌行燈」のお三重と重なってゆく。突然能役者の父を失い自立せねばならぬ境遇になり芸者を余儀なくされるがなんとも不器用でチンとも三味線を弾けず、座持ちも出来ず周りに疎外されてゆく。

私も同じ：と寝ても覚めてもそれが頭から離れず、その不安を払うかのように多くの稽古を重ねていった。4人の共演者はその道の達人ゆえ多忙を極め、日程が合わずなかなか合わせる事が出来なかったが、真摯に取り組むその姿勢に何度も励まされた。と同時に自分の未熟さが露呈し何度なくじけそうになったがこれが最後の舞台！と覚悟を決める。するといつの日だったか一筋の光が窓から差し込んだ瞬

間があった。それは芸の背後を守ってくれる霊だったのかもしれない。と今にして思う。不器用なるがゆえに、いつかは思うように三味線を弾きたいという一心に取り憑かれ、幾つかの恋を置き去りにしてしまい、気がつくとも側にいるのはいつも三味線だった。なぜ20年もの間「歌行燈」の再演を心に秘めていたのか自分でもわからなかったが、今回自分と向き合う時間を多く持ったことで演出担当の飯名尚人氏がコンセプトとした「芸は伝授してゆく者の魂が亡霊となって演者と重なる」由縁が少しずつ浮き彫りされていった。6歳で杵屋六三知師から長唄の手ほどきを受け、夢派の叔母から小唄の指導を、石川譚月氏に作詞作曲の講義を受けたことから富本節の後継者を託され、神楽坂まき子師から端唄、俗曲。岡本文弥の一番弟子だった岡本宮ふじ師から新内節。そして地唄舞の閑崎ひで女師から紹介され地歌の重鎮西松文一の唯一の弟子としての入門を許された。私の芸道には多くの方々の愛情と数々の恩師からのお導きのお陰で今の西松布咏が存在している。未だにそのご恩を返せない至らなさを思いながら次第に12月4日の舞台が迫ってくるが、どうしても聞いて



写真 中川達彦

欲しいひとがいた。今は亡き両親、友人の加藤多貴子、そして海外や異分野の世界への道しるべとなってくれたジョンソルト氏である。今では遙か遠くの叶わぬ夢だが、私の「闇に燈る聲」は必ずどこかで聴いて下さる。の一念で今日まで唄い続けてきた。シアターXの隣に建つ回向院に眠る竹本義太夫や中村勘三郎の墓にも師走風が吹く当日は幸いにも穏やかな日和であった。いつも舞台の袖で心配していた多貴子さんの辻が花の着物が緊張した私を優しく包んでくれる。左右に朱色の燭台の舞台に、真つ白な雪景色と漆黒の闇が広がる。唄い始めるといつしか過ぎし日々に解き放たれ恩師らの霊が暖かく見守って下さる幸せを思った。

かくして20年ぶりの最後の演目「幻のお三重」は、至芸の4人の共演者が一つとなって泉鏡花の世界を闇から浮かび上がる宇宙へと届けて下さり、まさに一瞬の一億光年の旅となった。

夢覚めやらぬまま一同揃って舞台に並んだ時、闇の中から「ブラボー」の聲が聞こえた。空耳かしら？と思っただけ遥か昔聞いた「闇に燈る聲」のようでもありいつまでも耳元で木魂していた。私にとつての恩地喜多八が空から舞い降り、謡ってくれたよう嬉しかった。

隅田川の流れに感謝した令和5年は暮れゆき新しき六年を迎えた元旦。またしても大地震が日本列島を覆い、3日には日航機と海保機が衝突し炎上。と信じられない大惨事が続いてしまった。

昨年は古来の霊に守られながらの日々であったが令和5年は振り返りながら未来に向けてどのように生きて行かねばならないかを突きつけられる年明けになってしまった。奇しくも「美紗の会たより」が100号を迎えた。

それぞれ重要な仕事を持ちながら古来から累々と続く三味線音楽を心の糧としながら稽古に励んでいる会員たちの「たより」。

本年も皆様にお届け致したく幾久しくお付き合い下さいますようお願い申し上げます。

卯さぎの年よ、さようなら—— 喚び、応諾する「主人公」 小野原教子

布詠師匠から、泉鏡花の世界を演じるとお知らせを頂いたのはいつだっただろう、夏の終わりが秋の始め頃だった、草のような美しい文字の郵便が届いた。うさぎを飼うようになってから、泊まりの仕事も遊びもあきらめていて、それは自然なことでも苦でもなく、かえって厭事の場合は断るのに適当な理由にもなっていた。

卯年神無月の満月は部分月食を伴い今年最大の大きさとの触れ込み、その日早朝、太陽が昇ると同時にうさぎが死んだ。この二年の間に大病を得たわたしにとって、いつも側にいて支え励ましてくれる大切な存在となっていた名は、グレーと茶が混じって、ものを燃やしたような毛色にちなんで、「すす」と思いついてそう呼んでいた。

すが月に還って以来、呆然としていたが、反射的に、悲しみのなか、わたしが一番初めにしたことは、布詠師匠の十二月の舞台公演を思い出して宿をすぐにおさえ、伺いますと上京の連絡をしたことだった。

うさぎが来たときは、パンデミックの真つ只中だったが、東京へ行くことは、ようよう数えてみれば八年ぶり。おのぼりのわたしは、旅の前日から緊張で眠れず、両国橋を渡り歩いてからシアターに向かうことに決めた。

劇場に到着すると、ガラスの扉前で人だかり、蛇がとぐるを巻くような列を作って観客が入場を待っている。詩人仲間のジョン・ソルトさんの姿を見つめる。師匠とも関わりの深い方なのでご存じの方も多いと想像するが、ジョンさんはご自身の独立系出版社で布詠師匠の音源のメディア化をされてCD作品三枚、アルバム「夢」の映像詩作品集と大野慶人さんの舞踏のコラボレーションを所収されたDVDも制作されている。わたしもCDサイズの詩集を作って頂いたことがあるアメリカ人詩人で北園克衛研究家。挨拶がてら少しだけお話しができ、わたしが着ている服も褒めてくださり、普段海外におられるので、お会いできた偶然を喜んだ。わたしは音響機器のすぐ前、観客席の最後尾の中央に座ると間もなく幕が開けた。

布詠師匠の登場。照明は仄明るいがお姿が眩い。師匠のお話はいつもわかりやすく、おもしろいし、勉強にもなる。一切何もメモのようなものを見られずに、前をまっすぐ向いて話されるのが印象的。今年布詠師匠の生誕150年とお話の後、四曲演奏



された。そのうち「嘘のかたまり」は、とりわけ大好きな小唄で、師匠のアルバム「夢」にも所収されている。DVDになった「夢」に、わたしも煙草のモチーフで映像作品を寄せた。うそのかたまり、まこととのなき、そのまんなかに、かきくれて…。「嘘をつく人のお腹の中には灯りが灯っているという、その灯に手をかざしてあたたまりたいと思う」。自作の詩「嘘について」のフレーズとも重ねながら、師匠のはりあるお声が雪のように落ちて積もっていくような情景をイメージしながら、散歩で冷えたから少ししづつ暖まってくるのだった。

うるわしくそしてつややかな、ぴんとはりつめた芯の炎のような糸と唄、儚くそれゆえ一塩につよく響いていく。わたしのどんよりと重く疲れたところは照らされるようだった。

いよいよ、泉鏡花と伝統芸能の「現代」が、織られ編まれる舞台の時間に入っていく。

まず、わたしにとって衝撃だったのが、お能の水寛二さんの舞。その動きの数々、この筋肉の動かし方は何だろう、そもそもどんな筋肉なのか、とにかく一挙手一投足まばたきをして何度も目を見張るように、見入った。わたしはまるで子どものように能楽師に心を奪われていった。今回の舞台は一言で言えば簡素で、衣装が存在を消しながら存在している黒子のようで、それで一層身体表現として、からだの動きが際立って見えたのかもしれない。区切られた舞台空間をダイナミックに「舞う」ことで、限られていることによってよりその空間が拡大し膨張していくような感覚に陥る。それは錯覚なのかも知れない、存在しないのかも知れない、けれども確かに、わたしの身体に刻印されるように、異界への道が一瞬、極限られた間にだけ、開かれ招かれているような、わたしへ届く、そんな誘惑のような体験だった。

江戸に後る髪引かれつつ明治を生きる、そのちょうど真ん中にあるような「歌行燈」、もう一人の舞人服部真湖さんは、鏡花の作品の醍醐味を「現代」の文脈の中で演じ切れる稀有な役者なのではないか。すらっと背が高く、目鼻立ちがはっきりしている容姿は言うまでもなく、内面ともに無国籍あるいは新しい日本(人)像を体現しているような。そんな美しい女優が「日本」を舞う。旧き佳き世界の存在を舞う。伝統芸能の歴史と伝統の重みが、情念にあふれていながらからっと明るく、その暗さも同時に併せ持ち、引き受けていくメディアⅡ媒体のような存在として。日本舞踊の指先の表現は、舞台を日頃見る機会がない者にとっても、点から宇宙を描く、柔らかに繊細で芳醇な世界に映る。

ここではないどこか遠くにつながるような時空間、身も心も奪われたようになり、おそらくわたしの状態は夢か現か、半分眠り、半分覚めたような状態で、舞台を見つめていたとおもう。ふとわたし一人が取り残されたような、自分が何処にいるのかわからず真空の空間にいるような不安をおぼえていると、山根基世さんの語りによって、現実の世界に戻されてはとなり、ほっとするのだった。確固として一貫性を持った信念そのもののようなストーリーテラーの存在。次の幕へ、新しいシーンへ、観るわたしを、生きて呼吸するわたしを、前へ進めて、押し出してくれる。鏡花の国語を正しく伝えていくことのできる、もう一人の媒体の存在としてもその人は立っていた。

気がつくとき、ページは捲られている。唄と楽器は、色柄となり、陰影を織り成す、物語の風景を彩っている。薄闇の女の衣装以外は置き去りにされているような、ほとんど装飾のない舞台のセット。善養寺恵介さんの音色は風と一体化している。海から厳し

く人を倒そうとして、あるいは町の賑わいの中に聞こえるお囃子にも似ている。布詠師匠との共演は何度もされておられるのだろうか。お二人の呼吸がぴったりで、蠟燭の炎も揺らさぬような静寂に満ちた、まるで平面に描かれたような風景の音楽を奏でておられた。

「現代」の伝統芸能が背負っているのは、歴史的民族的価値に裏打ちされた一貫性の深刻な中味の継承と、その容れ物である型を譲り渡さないという信念のような使命。厳しい稽古を重ね、芸を磨きながらも、柳のようにしなやかに、黒い風に吹かれれば時に靡いてみる、そんな野望のような勇氣のような心意気のような挑戦もきつと今必要とされているのだらう。目には見えねど、深刻にして大切な何か。その存在を守り抜くために自分の生を捧げる。「闇に燈る聲」は、その舞台が、答えそのものだった。わたしたちは、問うことに必死になり過ぎ、答えへの道のりはあまりにも遠い。答えそのものを生きている。伝統芸能の謹厳と革新、その前衛性を提示していた。戯言のような拙稿も終わりに近づいて来た。公演が終了し、写真撮影されている人々の間をぬって、師匠に、ここに來られた喜びとご公演の素晴らしさを伝えたいと思った。演じられた芸の凄さは言うまでもないが、企画そのものの斬新さと唯一無二であることも。

開口一番、邦楽家西松布詠は、わたしにこう語った。「最後だと思っていたけど、やっぱり終わらない、芸の道に、終わりはないのよ」

偉大な師匠という存在を凌駕して、わたしの大好きな音楽家。あらためてそうおもった。わたしは果たして意味がよくわかってるだろうか、この真摯な言葉をわたしに話してくださったこと、そのことそのものに感動し、感謝した。

神戸に戻り、しばらく泉鏡花のことを調べていたら、鏡花がうさぎ好きであったことがわかった。正しくは、自分の向かい干支である兎の置物をコレクションしていたようだ。その動物に因んだ物を身の回りに置いておく縁起がいいとされる古い言い伝えがあり、自分にはない要素を補足してくれるのが力が増すという意味もあるらしい。

言葉を話さない動物と人間との間にはお互いにしかわからない不思議なコミュニケーションが生まれる。うさぎは声帯を持たない。そのためか一層テレパシーを感じることが多かった。眠れない夜、月明かりも鬱陶しいほどで、悩み憂いていると、ライトも点けないし音も何も出さなくても、うさぎはどこからか走ってきてわたしのベッドに飛び乗るのだった。今も気配を感じている、死んでもなお、わたしを支えようとしている。遺された者が前を向かないと、死者は自由になれない。初雪が降り、うさぎでもまことでも、覆いかぶしていくように、言葉も重なっていく。元々禅語だった「主人公」という言葉は、自分が自分の主人たれ、と言う意味を本来持つ。「死んでも、人のおもちゃになるな」と言った、喜多八の言葉を胸に、前を向いて生きるようになったお三重。わたしはわたしを見つめなければならない。自分が自分の主人であらねばならない。うさぎが感情表現を音にする唯一の行動が、大きな足を使って床を踏み鳴らす、通称足ダン。能楽者の床を踏む音は地球の芯にまで真つ直ぐ届いていそうだった。わたしの耳の奥に今でもその音がのこっている、胸に燈っているかのよう。

ありがとう、すす。そして、ありがとうございます、西松布詠師匠。

「闇に灯る聲」演出ノート

飯名 尚人

春に西松布咏さんからのお電話。泉鏡花の「歌行燈」を題材に、公演をお手伝いすることとなり、演出構成という大役を。創作曲「幻のお三重」（作詞・田中優子 作曲・西松布咏）は、「歌行燈」に登場する芸の出来ない芸者お三重を描いていて、今回の公演の目的は、この「幻のお三重」の読み解き直しということになった。お三重という女性是不思議な女性で、お座敷芸がまったく出来ないほど不器用であるが、「そんなこと言われたって、わたし、できないんですもの、仕方ないじゃない、皿洗いならしますの」と弱音も吐くし諦めもする。相当いじめられて生きてきたが、その悲壮感はなく、どこかあつからんとしている。三重井がそう聞こえさせているのかもしれない。

小説「歌行燈」は、かつて映画化されていて、ひとつは成瀬巳喜男監督（1943年制作）、もうひとつは衣笠貞之助監督（1960年制作）。残念ながらどちらの作品も、泉鏡花の文体、リズムは失われ、時系列が整理整頓された簡単な恋愛ドラマで、物語のあらずじが示されただけの映画のようであった。

小説「歌行燈」で強く感じたことは、時間が逆行していくことで露わになる芸と霊の関係である。芸は先人から引き継ぎ、また次に繋いでいくものであるから、ひとつの芸には何十年、何百年の歴史の中に人の生き死にがある。その芸を披露するとき、その背後には先人の霊たちが取り巻き、時には足を引っ張り、時には奇跡をもたらす。

喜多八がお三重に、夜中の松林にて能の仕舞を数



写真 中川達彦

呪いのような怖さがある。誰しもが師匠に畏敬を持ちつつ、その呪縛から抜け出し、自分の芸を獲得しようともがく。能の亡霊がもたらす呪縛を、歌行燈の登場人物たちは背負っている。その深みが泉鏡花によって美となっていく。

「歌行燈」の魅力に能の存在がある。能の「海士（あま）」のワンシーン「玉ノ段」。海女が、子供を救うために龍から珠を奪うが、珠を隠すために自らの乳を切り、その中に珠を隠す。能では男の身体によって演じられる「玉ノ段」は、地唄舞「珠取海女」として、女性によって舞われることになる。お三重は、船頭たちのからかいで海に沈められたり、芸者のお姉さんさんたちからはひしゃくで乳に水をかけられたりと、散々な目に遭ってきたが、これらは能の「海士」をなぞった描写である。読めば読むほど、「歌行燈」には隠された記号があり飽きることがない。

2023年12月4日、いよいよ一夜限りの舞台。出演者は霊を背負った芸をお持ちのみなさん。第一部は、布咏さんのソロで小唄四曲と語り。小唄「両国夜風」から「初雪」へ、ゆつくりと室内の男女の世界へ入り込み、「嘘のかたまり」で心の中へ。新内小唄「歌行燈」で鏡花の世界に誘う。第二部は、お三重（服部真湖）さんの地唄舞「珠取海女」、そして喜多八（清水寛二さん）の「海士」からの仕舞「玉ノ段」。二つの様式美がぶつかり合う。休憩を挟み、第三部「幻のお三重」で鏡花の幻想世界に没入する。ラストシーンは、お三重と喜多八が、二人並んで仕舞を踊り続ける。清水寛二さんがふと舞いをやめて、取り憑かれたように舞う服部真湖さんを眺めている。そうかと思うとまた寄り添うかのように共に舞い始める。山根基世さんの言葉と声は朗読という様式から徐々に演劇的に仕上がり、空間を駆け巡り、善養寺恵介さんの尺八が霊を肉体化し重くも軽くも変幻自在。

日で伝授する。松林はお三重の父が死んだ場所でもあり、またその父を辱め死に至らせたのは喜多八である。亡くなった者からもまだ能は失せることなく、しっかりと喜多八に取り憑いている。芸者のお三重に能の仕舞を教えて、困ったら座敷で披露しろというところにも、泉鏡花の面白さを感じた。お座敷で仕舞を始める芸者の姿に、喜多八を破門にした師匠たちは見抜く、「それは誰から教わったのか」と。芸からその背後にいる者を見抜いたのである。芸とは

西松布咏さんの三味線と唄は細かく振動して闇とも光とも言えぬ宇宙的時空を作り上げた。演出と言っても、私がしたことは最後に塩胡椒を少々。味を整えただけであって、お客様が味わったのは各々の素材の味。それぞれの背後に見え隠れるする霊との共演とも思える見事なパフォーマンスであった。

秋の音、冬の聲

高橋輝一郎

お久しぶりです。高橋輝一郎です。調べたところ前に寄稿させていただいたのが2021年の入りの頃でしたので約二年半ぶりになります。ここ2ヶ月、美紗の会では立て続けに大きなイベントがあったわけで何から話してよいのやらという状態ですが、まずは「第六十六回 美紗の会のつどい」、お疲れ様でした。

今回は「秋の夜」、「文弥くずし」、「かつぽれ」の三曲をやらせていただきました。どの曲も新しい試み、挑戦をした中で「文弥くずし」でのお客さんを巻き込んで演奏するという試みが特に大変でした。盛り上げ上手の典咏（かたせ梨乃）さんが唄ってくれなければあの盛り上がりはなかったと思います。（これはギターやピアノで弾き語りをするときもそうなのですが）手拍子と一緒に弾くというのが案外難しく、思うように演奏できなかったので、また挑戦してみたいと思いました。

「かつぽれ」は唄とのタイミング合わせが難しく稽古の時はお互いなかなか苦戦していました。流石の川崎さん（上から目線みたいな言い方ですが言わせて下さい）、自分の味を出しつつしっかり合わせてくれました。「秋の夜」ではロングトーンの連発

と息継ぎのタイミングの掴みづらさが大変でした。三味線を弾いてくれた秋咏さんからは稽古の際に、「この曲の主人公は大森南朋みたいなイメージだからその感じで歌ってね」と言われてまして（笑）、そのイメージが出せたかどうかは分かりませんが、珍しく感情を込めて歌えたかなと思います。共演してくれた皆様、ありがとうございました。今回の会では三味線の皮も張り替え、心機一転頑張っていました。そして、もう一つの大きなイベントというのが「闇に灯る聲」です。誤解を恐れずに言うと（終



写真 前川 充

演後の打ち上げでも皆さん仰っていました。その魅力を言葉にするのが難しい公演でした。「吸い込まれるような空間」、「幽かな情熱」などとあれこれ考えましたが、どれもしっくり来ないのです。とはいえ僕も一応詩（詞）を書く人間ですので公演が終わってすぐに、近くの花壇に座ってひとつつ短歌のようなものを作りました。短歌のようなものと言ったのは、実はここ最近、恥ずかしながらインスタグラムにて「#なんちゃって短歌」というタグを付けて季語や韻律の縛りのない、思いついたままのただの31文字を写真と共に載せるというのをやっておりまして、この公演にまつわるその歌もパンフレットの写真と共に投稿させてもらいました。作った人が解説をするというのも野暮なのでそれをそのまま引用してこの文章の結びにしたいと思います。「スポットライト 聲の力闇と光と恋のゆくえ 忍び足」

「秋の雨と心のテンポ——十二月十二日 第六十六回美紗のつどい ヤリタミサコ」

雨の日の午後は、足取りも心もテンポがゆっくりしてきます。空を眺め湿度を感じ環境と対話し、忙しい現代人も立ち止まることになりました。そして田町駅から数分歩くと、ビルの間から伝統文化交流館の木造建築が見えてくると、ほっと気持ちが落ち着きます。

今回は、出演者の唄の心が迫ってくるステージでした。九月に那須で演奏会を開いてから一月半のうちにまた新たな曲に挑戦するという、ハードなスケジュールだったのですが、短期間のうちに自分の内部に唄を取り込むことができたようです。それは技術だけの進化ではなく、日常から少し隔たり

のある小唄や端唄に対して、自分自身が親密になっているからでしょう。そのような心理的スタンスは、芸術を深めます。

布咏さんが「へたの自覚」ということを最後におっしゃっていました。たぶん、初心者は全体を整えるのに精一杯、熟練者は聞き手から見て良くできあがっているように見えても、意図どおりの演奏に達していない点に対して自分自身の未熟さを感じる、ということでしょう。演奏することは、演奏しながら自分を客観的に見るということでもあります。自分は自分一人なので完全に客観視はできないのですが、なるべく自分から離れるように冷静に見るようにすると、足りない部分が見えてくるはずですよ。こうしたい、や、こうなりたい、は主観です。自分の個性をそのままに欠点を受け入れる（これが難しい）ことから客観視がスタートします。

短い準備期間であっても、出演者それぞれが唄の心を自分に引き寄せていたこと、その心意気と気迫が感じられる舞台でした。高橋（輝）さんは安定した音程の良さが耳に残ります。高橋（美）さんの「様は山谷」では、元気の良いセリフに「ちくしょう」が可愛く、これは唄と唄い手の柄が合っているのでしょう。三浦さんの「書き送る」は節回しが巧みでしたが、もう少し音量が欲しいところです。「逢うて別れて」の咏治さんは高音の表現が素晴らしく、斎藤さんの「香水」は言葉の発音がきれいで意味が明確に伝わってきます。「惚れて通う」の桜井さんの唄も情景が豊かに伝わる粋な唄でした。「青柳の糸」では幸咏さんの渋い声と、美咏さんと咏扇さんの糸がだんだんと合ってきて、ドラマティックな展開を経て劇的なエンディングに着地しました。高橋（祥）さんの「二上がり新内」は唄の巧さに参りました。言葉では一音なのですが、その一音を上下させて感



写真 前川 充

情を表現するテクニクが素晴らしいのです。「勝名のり」の川崎さんは、待ってましたーで、美声に加えてテンポの良さが華やかさを作り出します。「移り香」と「文弥くずし」では客席を巻き込む演出が新鮮でした。「お園」は待つ女として典咏さんの劇的表現がぴったりで、「仇情八幡祭」の後演さんの情感が豊かでした。「蜆川」の紫咏さんは唄と糸との調和が聞き手を魅了し、「柳やなぎ」の咏扇さんは一段と唄と糸の世界が深くなりました。咏治さんと俊咏さんのコンビも、鶴咏さんの熟練した味わいも、悠咏さんのゆったりと深い唄も素晴らしい演奏でした。強いて言うとな部分的には、もう少しユーモアが欲しいなあと、陰りが欲しいなあと、強弱がつくとよいなあと感じる部分はありましたが、格段に糸が巧くなった方、唄を自分のものになっている方、そういった魅力が溢れていました。

後半の始めに登場した高円寺亭若乱珍さんのご当地落語は明るく楽しく、場面転換にぴったりです。そして最後の扇ひでさんと布咏さんの二曲は、女と男が演じ分けられていて輪郭のはっきりした舞踊でした。扇ひでさんによる梅の古木の姿を連想させる立ち姿が美しく、雪を払う仕草も綺麗で、待つ身の女の情感が布咏さんの切ない声から伝わってくる演奏でした。雨の日には、陰りのある美がより深く感じられるようです。また次回の皆様の個性豊かな演奏を楽しみにしています。

「感謝感激雨霞」

伊勢 克也(克咏)

11月12日「美紗の会」のつどい」が開催された。全ての演目を逃さぬようにと家を出たものの会場に着くと開演の時間はとうに過ぎていた。2階の会場へ

の階段を上がると広いお座敷をもてあますくらい軽い心地よい緊張感を感じる。かつて演じる側としてあった場に客としてあることになんかとまどってしまふ。久しぶりに柴又に戻ってきた寅さんあのま、ばつが悪そうにしているのに変に背筋を伸ばして辺りをキョロキョロ。一度けつまずいてから慌てて近くの席に着く。それから身を小さくして改めて周りに探りをいれる。

さて、一息深呼吸をして気を舞台へ。番組は八番を迎えていた。詠治さん唄の「逢うて別れて」糸は紫詠さん。すぐに持っていられる。詠治さんの色気のある声は相変わらず、少し音階が外れるところがたまらない。いい音のする喉とよく響く胸腔と頭蓋を持つている。少々音が外れても心地よい。糸をこのズレに上手くあてられたら素敵なんじゃないかなーなどと。素敵な声といえば、高橋パパ♡高橋(祥)さん。「二上がり新内」にはちよつと聞き入ってしまった。音量があまりないのがたまらない。声が小さいこともひとつの魅力ですよね。弱さの存在感についてうのかな、そんなものにグツとくるんですね。詠治さんと高橋パパは6畳くらいの部屋で聴きたい感じですよ。糸は詠扇さんをお願いして。まー、いずれにせよ番組の前半は楽しい。本番前の少し緩めの緊張感の中でいる唄と糸の組み合わせが楽しめる。それぞれの気の入り方や曲との関わり方も違う。音のずれ方、言葉の強さや解釈の仕方、表現のニュアンスも違う。そんなちよつとした不協和音がとても味わい深く面白い。ときどきとても良い音が仕上がる瞬間もある。もちろんそんな番組の裏ではゲームマスター(?)として師匠が糸を引いているのだ。

そういえば前回の「つどい」で俊詠さんと詠治さんが会長になられたその披露があった。で、今回は、

また新しい「美紗の会」がお二人の会長の元でどんな世界を見せてくれるのか大きな楽しみの一つ。この数年で演者も少しずつ変わったことで趣向も随分と変わるのだろう。前半戦でおおよそ出演者、つまり今の「美紗の会」皆さんのキャラクターを確認して本番を迎えることとなる。

本番は難しい。日々の稽古で唄も糸も「何か」へ向けて精度をあげていくのだけれどなかなか辿り着かない。情景を表現しようと懸命に稽古するのだけ



写真 前川 充

れど、思いを込めようと感情を昂らせるのだけれど離れていってしまう。「何か」は演目によって違ってくるが、その「何か」が始めから分かったつもりでいくと往々にして辿り着けず本番で痛い目に遭う。気合を入れていくと途中ですつ転んだり。「あーでもない、こーでもない」を繰り返して、それでもギリギリまで違和感は消えず「もう儘よ」って舞台上に上がる。よるよると始めて身を任せたその先で思いもよらず「何か」に出会ったような気がする。それは思い描いたよりも抵抗感の無いあつさりとしたもので拍子抜けしてしまったり。そんなことが本番で起きる。額に汗、脇汗びっしょりで最後におじぎをして横に目をやると、師匠が目を瞑ってうなずいていたりする。

稲垣さんの軽妙な司会で番組は進み、見慣れた方々の演目が連なる。ほんの数年の間なのにみなさん以前とは違う世界を作り出している。そんな変化に何度も驚き関心してしまう。川崎さんの「かつぽれ」の潔さに「へー」。三浦先生の笑う糸を粹にあしらう斎藤さんの「神田祭」に「うひょー」。典詠さんの真つ直ぐに芸に向かう美しさに「うっとり」。そして、会長お二人を傍に従えた悠詠さんの「蘭蝶」に「むむっ」となり、そこから続く弾き語りの演目に「どひゃー」です。

弾き語りの難しさは僕には想像もできない。全てをひとりでコントロールしながらその演目に入り込んでいくわけですよ。ひとりで「何か」を探すわけですよ。頭を2つに割ってしまうか、唄の世界に完全に溶け込んで消えてしまうか、何者かに憑依されるもしなければ到底無理でしょ。その上で弾き語り5人には恐れ入りました。中でも「柳やなぎ」の詠扇さん。格が違いますね、さすがです完璧に消えてました。お見事。「紀伊の国」美詠さん。もじゃ

もじゃ頭のくせにしつとりとした色香。いい女になりました。控えてふと見かけた美咏さんの足袋のこはぜを直す仕草と姿。完全に頭に焼き付いてしまいました。で、鶴咏さんです。地唄「落し文」。実は最近大師匠西松文一の地唄や中村明一の虚無僧尺八をアンビエントのプレイリストに混じえて聴いているのですが、突然入る息の音と風の音にハッとさせられるんです。鶴咏さんの演目にはそれがありました。文一さんがいた、そして風の音も。音圧のない声なのですが、染み込んでくるような体内の穴を抜けていくような。鶴咏さんの演目の後、僕は完全にどこかへ飛ばされていましたよ。

5つの弾き語りの演目からは唄や三味線に対しての5つ物語が見えたような。それはそれぞれの唄や三味線、演目に対しての距離感であり、5人の方々の内面につくられてきた物語との共振と呼べるようなものかもしれない。なので5つ全ての世界様子が違っていた。やはり僕には到底手に負えない。感服敬服至極。

鶴咏さんの「落し文」でどこか違う世界を彷徨って気がつく、もう番組はお仕舞いへ近づいていた。開き過ぎた身体中の穴を閉じて、また気を舞台へ戻すと見慣れたご婦人がお二人。ちよっと毒舌の姉御お二人、幸咏さんと悠咏さん。演目は「箕輪心中」。始まって唄が入ってすぐ、あれ？何かが違う。お二人の演目は何度も拝見しているし「箕輪心中」も初めてではない。でも、今回は別物。幸咏さんの唄の音が違うものになっている、喉に「さわり」が入ったというか良い感じのノイズが唄に絡んできて、それは別人かと思えるほど。悠咏さんの糸ともうまいこと絡み合っていてあつという間に五千石問題の件へ。「うーん、参った」素晴らしい出来で腰が抜けました。そして最後は文字通り重鎮大トリ川崎さんの「山

中時雨」。これまた会長お二人を従えて堂々と、でも声は軽やかに高く響いて山々に反響するよう。十九折りの山道の風景や、ひっそりと賑わう温泉宿の夜の空気が見えるようでした。会長のお二人の三味線は演目に入り込んでゆく川崎さんをしっかりと担ぎ上げて峠をのぼり降りしてゆく。御三方による演奏で山をゆく旅の良い景色がみえました。

いろいろな模様を見させてもらった「つどい」の時間は、最後、閑崎扇ひでさんの舞でメとなる。踊りの面白さを知ったのはこの会での千寿文先生との出会いだった。それから踊りを見る時は目を皿にすることを忘れない。師匠の作る音と扇ひでさんの踊りを探りながら、重ねて千寿文先生を探してしまふ。あのキれるような舞台上の絵づくりを思い出していた。千秋万歳

今回は僕にとってまた格別な「美紗の会」のつどいであつた。最初の数番組は逃したものの、通しで見るのは実は初めての事、それも客として。これはつまりは全て他人事として番組を楽しむ良い機会であつたということ。

そんな機会に改めて気がついたのは、この会は師匠西松布唄の世界で遊ばせてもらっているのだなあということでした。そりゃ、お弟子さん皆さんは唄と三味線に向き合いながら、または弄ばれながら精進されているわけですが、それも実は師匠が後ろから糸を引いたり緩めたりしている。つまり師匠に遊ばせてもらっている。ツンツン感じませんか？面白いことにこの会には沢山のちよっと変わったキャラクターがいて、生意気なことを言いながらそれぞれ勝手に芸に向き合っている。その全てに師匠の糸が繋がっていてツンツンされている。師匠は沢山の糸を手にして、オカメやヒヨットコの絵の描かれた風を引っ張ったり緩めたり。そんな幾つもの風のそれぞ

れの動きやクセを見定めてツンツン。顔は半分優しく笑っている。年に2回の「つどい」では弟子たちのキャラクターを見定めて、毎回番組構成を練りに練っている。ホント恐れ入ります。番組ごとの前振りのコメントも全て師匠の手になるもので、こうなるとどこまで行っても師匠の掌の上、孫悟空もびっくりだ。でも、会の皆さんのキャラクターは趣向となって新しい会の世界作りに関わっている。なので、ある時期、また違う時期の「美紗の会」の世界の様子は少しずつ違っている。その中でちよっとしたキモとなるのが会長さん。今回も新しい会長お二人はちゃんと世界を定める重しになっていた。重しは重ければいいってもいでもない。良い漬物は良い漬物石があつて初めてできあがるわけで、今回拝見して面白い味の漬物ができる気配はもう十分していました。お二人の重さじゃどうしても押さえきれないご婦人方もいらつしやいます。その時は川崎さんとうまいこと使っていけば大丈夫。なんか途中から漬物の話になってしまいましたね。何はともあれ西松布唄師匠の世界で遊ぶなんて随分と贅沢な遊びじゃないですか。

■ たより 第100号

発行者 美紗の会
編集責任者 己紗俊咏
デザイン 近藤幹則

■ 美紗の会

主宰 西松布唄

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台プレイス三階

電話 (五四四七) 一四二二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>

